

## 先生のための夏休み経済教室 in 大阪（中学対象）一日目記録

日時：2019年8月5日（月）9時30分～16時00分

場所：国民會館 12階大ホール（武藤記念ホール）

参加者：関係者を入れて85名

内容の概略：進行役を奥田修一郎先生が担当して以下のような教室が行われた。

### 1 時間目 「新学習指導要領の下での経済教育」樋口雅夫先生（玉川大学教授）

#### （1）はじめに

- ・現在の学習指導要領は2008年告示で現在、中学校は全面実施8年目になる。
- ・特徴として、対立・合意、効率・公正が入り、見方や考え方が強調された。また、活動型の授業の導入も目指されている。
- ・アクティブラーニングは、子供たち同士が学ぶこと自体に加え、知識を身につけ、思考力・判断力・表現力を身につけるといって一石三鳥をねらっている。
- ・私自身、昨年から大学に移り、大学生を教えているがそのなかでも活動的な授業を取り入れている。できるだけ10分以上続けてしゃべらないようにしている。

#### （2）学習指導要領の改訂の背景

- ・約10年に一度改訂が行われるが、改訂には現代的課題が背景にある。例えば、今回は、2022年からの成年年齢の引き下げがある。高校の教室で大人と子どもが混在することになる。そのためにも、小中高の接続を考えて準備をする必要がある。
- ・「また変えるの？」ではなく、「現在やっていることが全部変わるわけではなく、今までやってきたことを生かしてどのような流れで単元を作るか」が問われることになる。つまり、変わらないものはそのまま可能であり、変わったところをどう組み込んで行くのかが問われるのである。
- ・変化の動向でまずあげられるのは、AIの進化とその対応である。中教審の委員の方もこの問題は危機感をもって発言されていた。
- ・どのような社会をつくるのか、そのために資質・能力は何かという問題意識で改訂が行われたのである。

#### （3）中学社会科の改訂のポイント

- ・改訂のポイントは三つある。
- ・一つは、伝統文化の学習に加えて、主権者の育成、防災・安全への対応、海洋や国土の理解、グローバル化、産業構造の変化への対応、持続可能な社会への対応である。
- ・二番目は、社会的な見方・考え方を働かせて、社会的事象の理解・考察を図ることである。
- ・三番目は、社会の課題を把握して、その解決のために考察、構想することである。
- ・これらのねらいを達成するには、汎用性のある概念を理解させることが必要である。それは教え込みでは身につかない。

- ・そうはいつでも、一時間で三つの課題を扱うのは無理である。中学校であれば授業時間は週4時間なので、2週間程度、8時間構成くらいで一つの単元で配置すればよいのである。だからその中の一時間をすべて調べ学習にしてもよいし、逆に知識を整理する、教える時間にしても良いのである。要は単元全体で課題が達成されれば良いのである。
- ・また、社会科内での学びの連関、高校の地歴と公民との連関も留意したい。例えば、社会保障では、財政の学習、租税の学習と組み合わせてゆく。教科書通りでなくとも、三年卒業時点である程度の力が付けば良い。専門家との協力で言えば、ネット上のフリーのワークシートを活用してもよいのである。
- ・小学校からのたての積み重ねにも注目して、いつ何を学んできたかを理解した上で、公民的分野の授業を組み立てることが必要である。
- ・概念に関しては、指導要領解説にある「現代社会の見方・考え方」に関する記述に注目して欲しい。ここに記された、概念に基づく思考トレーニングが大切である。これができている子どもは少ない現実がある。だからこそ、小学校から見方・考え方を育てることが必要になる。
- ・例えば、価格が上下するのをみて、なぜ？と思う、天候が左右しているのかと推測する、でも、もっと他の要因があるのでは…、そのなかから一般的にはどうだろうと思考してゆく。
- ・このような「比較、関連付け、総合」は昔からやっていたのである。それを「見方・考え方」で一貫して取り組むということである。
- ・カリキュラムマネジメントも同様である。
- ・ここでは教科間連携の例をあげてみる。クレジットカードの学習である。これは、現在は高校家庭科で扱っているが、新学習指導要領では中学校技術・家庭科の家庭分野にくる。キャッシュレス社会は不可避であるとの理由であり、金融リテラシーの育成が課題だからである。
- ・これを公民でやるとなると時間不足は否めない。そこで家庭科との連携が必要になり、カリキュラムマネジメントが登場するのである。

#### (4) 新学習指導要領の読み方について

- ・学習指導要領は、本文の内容、内容の取扱い、そして解説という三層で成り立っている。そのなかで、経済教育に関する記述をとりあげる。
- ・本文の内容では、「個人や企業の経済活動における役割と責任について」学ぶことが規定されている。内容の取扱いでは、「起業について触れるとともに、経済活動や企業などを支える金融などの働きを扱う」こととなっている。さらに、解説では、「社会に必要な様々な形態の起業を行うことの必要性に触れること、経済活動や起業を支える金融などの働きが重要であることについて扱うことを意味している」とある。
- ・このような文脈のなかで、金融をどう扱うか。それは、金融はどう社会に役立っているかから扱っていくことを示唆している。解説に書かれているが、社会の変化のなかでの金融の役割の変化や、通常の金融だけでなく起業との関連に注目させることからなる。
- ・金融教育ではかつて金銭教育、貯蓄推進が目指されていた時代があったが、今や金融は投資と関連させて時間軸にも着目させた概念の理解が必要となっている。

- ・こう言うと、投資をやりなさいと誤解されることもあるが、そうではなく、基本はかわらない。働くことが前提であるが、もし、起業するならどうするか、金融とどう関わるかという選択肢を広げて考えなければいけない時代になったということである。
- ・その場合でも、まずは自分との関わりから始める。終わりのところで難しいという感想がでてよい。難しいけれど奥が深そうだ、もっと学びたいという気持ちを持たせることができれば良い。

(5) おわりに

- ・中学校社会の目標を再確認しておいてほしい。経済を学び、それをもとに、次の政治学習で、あるいは高校の主権者教育で政治家の発言や、政党の主張の吟味が求められる。
- ・基礎的、基本的な学びの姿がここにあると理解してほしい。

<質疑>

なし

**2 時間目 実践提案「エコノミストとつくる経済の授業」**

**A「公共財供給ゲームを使って、税について考える？」奥田修一郎先生(大阪教育大学非常勤講師)**

(1) 問題意識

- ・配付資料とタイトルが違うのは、公共財供給ゲームを通して税について考えることができるかどうか、疑問を持ってきたので「？」をつけた。
- ・公共財供給ゲームは、公共財の最適な規模が民間の市場取引を通じては実現されないので、政府が代わって着手する必要性について理解させるゲームであり、囚人のジレンマの多人数版といえるゲームである。
- ・その教材化の事例が、ネットワークの中川雅之先生によって開発された「マンションの耐震改善ゲーム」である。
- ・これを中学生にやってみたが、生徒の理解に課題を感じた。それは、マンション耐震改修問題が生徒にとって身近な問題ではないこと、グループでの意思決定は当事者意識が薄れること、選択が三回であることでフリーライドが得であることの認識が持ちにくいこと、この問題が社会的ジレンマの構造であることが意識されないこと、前提である合理的な行動をするということが理解されないこと、社会的ジレンマモデルの原理に対する違和感があることなどである。
- ・そこで、奥田修正バージョンを作成した。

(2) 奥田修正バージョン

- ・意思決定は一人一人、選択は2回にする、マンション耐震の前に校内清掃や教室でのおしゃべりなど身近なジレンマ構造を示す、前提が理解出来るように条件を絞る、功利主義の原理以外の正義についても考慮する、などである。
- ・生徒の感想からは、一定の理解を示すものもでたが、税を強制的に払うことや払わないとどう

なるかなど、税に関して強制という点に注目する生徒や、やはりゲームの前提が分からないとする生徒がでた。

### (3) 2017年の実践「アラスカに住む日本人女性の悩み」

- ここまでの実践を踏まえて、次のようなゲームを作成して、中学3年生に実施した。この生徒たちは3年間担当した学年の生徒たちである。
- 導入で、当時TVで放映されていた「アラスカに住む日本人女性の日常」を扱った番組を5分程度状況説明として使った。(今なら、「こんなところに一軒家」が導入として使えるかも知れない。)
- アラスカでは電気、水道が来ていない地域がある。そこを600万円で5年まえに購入した日本人女性がいると仮定。でも、電気水道が来ていないと家の価値は限りなく0。そこで、電気工事や水道工事をすると価値があがるが、近所と一緒にやると不動産の価値があがるという設定にした。ただし、工事は各一軒が200万円出してもそれなりのものができるが、みんなが200万円出して1000万円にすると満足できるものとなる。
- 不動産屋さんは、工事をすると出した金額分だけ価値が上がるという。また、銀行員は200万円の貯金をしてくれれば年利10%が付くという。
- このような前提のもと、200万円を持っている近所の5軒が集まって話し合いをする。200万円も出せないと言う家庭、迷っている家庭、このままでよいという家庭などを想定させた。そのうえで、1軒だけが出した場合、2軒が出した場合を計算。すると、出した家の価値より出さなかった家の財産が上がるのが分かる。それぞれのケースの計算の早見表を用意して意思決定をさせる。
- 最初は個人で出すか出さないかを考えさせる。次にグループで考えさせることにする。その際、二つの質問をする。一つは、自分の財産を最大にするにはどうすればよいのか？もう一つは、5人の合計を最大にするにはどうしたらよいか？である。
- 授業の結果、数字に置き換えると理解度が深まるとした生徒、環境問題につなげて考える生徒、ただ乗りを防ぐことに注目する生徒、納得できるまで話し合いしかないのかとする生徒、身勝手な事をする生徒を防ぐには処罰しかないのか、と言う生徒など多様な意見がでた。

### (4) まとめと課題

- 中川教材、その修正バージョン、新しい状況設定のゲームと行ってきた。新ゲームは時間的には50分で収まる授業となった。早見表、ヒントカードの導入などが功を奏したと思われるが、数字の設定などはまだ工夫の余地ありと思っている。
- 一番の問題は、税を考えさせる課題としてはこれだけでは不十分ではないかということである。私的な設備投資ではなく公共財と税の関係をもっとしっかり捉えさせるべきではないかと考えられる。また、財政民主主義、市民社会の歴史からのアプローチからの教材開発が必要であろう。さらに、この種の学習の評価の観点をどうするかも追求しなければいけないだろう。

## B「公共財を題材とした教材開発～『雪かきゲーム』から考える」

行壽浩司先生(福井県美浜町立美浜中学校教諭)

### (1) 問題意識

- ・ マンションゲームを実施したが、中学生にとって身近な事例として捉えることができずにいるため、ゲーム理論を基に新しいゲーム教材を開発した。
- ・ 切実性から言って、地元ネタとして雪かきに注目した。2年前の大雪では道路の除雪費用に150億円の見積もりがなされたということもある。

### (2) ゲームの概容

- ・ 4人一組で雪かきゲームをする。トランプを用意(赤と黒)して、5万円相当のクリップをお金として準備する。
- ・ お金をはらって雪かきをしようとするなら黒、しない場合は赤を裏向きにして出す。
- ・ 4人の位置関係は以下の通りで、自分がお金を出すと、隣の分も除雪されるとする。

A	B
C	D

- ・ 例えば、Aが払うと、AB間の道路とAC間の道路も除雪される。
- ・ ゲームは5回行い、4回目と5回目の間にディスカッションを入れることで、より一層生徒間にて駆け引きが行われたり、あるいは合意形成をして5日目の除雪を上手く行おうとしたりする。

### (3) ゲームの実際

- ・ 当日の会場の参加者を4人一組にして実際にゲームを行った。

### (4) 授業の実際とその結果

- ・ 授業では、やってみた感想を全員に言わせて、それを黒板に書き、そこからこのゲームの持つ特質や、構造を抽出した。そこからは、公民的分野の「見方・考え方」である「効率」と「公正」の概念、フリーライダーをねらうとかえって支払う費用がかさんだり、せっかくのインフラ設備が活用されなかったりすること、実は斜め同士(AとDもしくはBとC)がそれぞれ1万円ずつ払えば2万円で無駄なく雪かきができること、自力救済ではなく、5000円ずつ出せば良いというような発見まで出てきた。それが「広く浅く徴収する」租税の考え方であることを生徒自身が感じ取った。
- ・ その上で、感想用紙に文章を書かせた。生徒は、「税金はいやなやつだと思っていたが、税金の大切さが分かった」とか、「みんなが等しくお金を払ってみんなが満足するのがよい」、「協力し合えば少ない金額で無駄なく仕事ができることがわかったが、払い続ける人と払わない人の差があると不公平になると思った」などの意見がでた。

- ・授業者として手ごたえを感じたのは、勉強の苦手な生徒が、「このように学べるとわかりやすい、社会が苦手なのでこのようなゲームで真剣に取り組みたい」と書いたことである。学力格差のない、誰でも取り組めて学べるような「ユニバーサルデザイン」の教材であると感じた。
- ・課題としては、積雪量まで加味するか、除雪の教材は降雪がない地域の生徒にとって身近な教材かどうかの再吟味である。

### C 野間敏克先生（同志社大学政策学部教授）のコメント

- ・公共財のゲームでは場面設定が問題になる。マンションの修繕は中学生ではやや無理があるかもしれない。生徒にとって身近なのは、教室や公園の掃除、雪かき（掃除の一種）などがあるだろう。さらに広げれば、水道、電気、ガス、道路、橋、鉄道、空港などがあげられる。地球環境問題も同じ質を持っている。
- ・ゲームのポイントは、相談をするか、個人でやるかになる。これは他人が見えるか見えないかの差である。
- ・今回のゲームは、奥田先生の教材も行壽先生の教材も選択によってだれの得になるのかがすぐわかり、計算も簡単にできるようになっていて取り組みやすい、すぐれたゲームとなっている。
- ・問題は、単発か、繰り返しゲームかであるが、今回は繰り返しゲームになっていた。
- ・今回の発表のゲームの問題点は、費用の出し合いが税の徴収と結びつけられるかという点である。このゲームからだけだと、なぜ政府が登場して税を徴収するかを理解させるにはすもうすこしジャンプが必要となろう。
- ・政府は、ただ乗りをふせぎ、負担を公平にするために強制力をもっているが、それだけでなく、仕事の重複を避けたり、持続可能性を維持したりするために存在することになるが、その仕事はだれがやるべきかを考えさせる必要がある。そのような仕事を、政府がやるか民間がやるかを考えさせる場面を設定してもよい。
- ・そのためには、公共財の定義の確認が必要になる。マトリックス（省略）を作ってみた。縦軸に非競争性、横軸に非排除性を置くと、両方が当てはまるのが公共財であるが、純粹公共財は国防や消防、警察など意外と少ないことがわかるだろう。
- ・環境などはクラブ財になるなど、教材を選ぶ時にはこのマトリックスを念頭において選択するとよいだろう。

<質疑>

なし

### 3 時間目 「東証新教材の紹介と実践報告『会社を知ろう！ 会社を応援しよう！』

岡部ちはる氏（東京証券取引所金融リテラシーサポート部）

#### A 岡部氏の教材紹介

##### (1) 新教材の概容

- ・新教材『会社を知ろう！会社を応援しよう！』は、中学、高校生対象の導入教材として作成した。構成は、会社を知ろう！と会社を応援しよう！の2パートである。各パートに動画、ワー

クシートがあり 20 分から 30 分で実施できるようになっている。

- ・説明や進行は動画で行い、グループでの話し合いや発表といったアクティブラーニングの要素を持っている。
- ・市場経済単元の導入もしくは復習で行うケースと、キャリア教育の一環として行うケースを想定している。前者では、教科書の内容を理解するときに企業活動のイメージが浮かぶことが可能になる。また、復習では教科書の内容の理解度を確認することができる。後者では、社会を見える化する一例にできる。

## (2) 参加者による実践

- ・教材説明のあと、参加された先生方が 4 人一組になり、会社を知ろう！の一部のワークに取り組んだ。それぞれのグループに割り当てられた業種の会社が行う事業プランを読み、起業家のつもりで会社の戦略を考えた。

## (3) 試行校の報告と総括

- ・これまでに 5 校に試行を行っている。その中で 3 校の実践を紹介した。その中の中高一貫学校の中学 3 年生対象の例（奈良学園中学校・高等学校）では、1 時限で 1 パート、計 2 時限 2 パート分の実践をし、特に生徒の発表に力を入れていた。岡部氏の発表中、実際に授業を参観していた先生からコメントをもらった。進行が動画でわかりやすく、生徒による話し合いに必要な選択肢も用意してあることで、取り組みやすい教材であると発表された。
- ・また、公立高校の 1 年生対象の例でも 1 時限で 1 パート、計 2 時限 2 パート分の実践をし、証券知識普及プロジェクト作成の『ケーザイの三つのトビラ』の学習につなげるねらいでの授業として位置付けた。
- ・さらに、私立高校の 1 年生対象の例では、2 パート両方から先生が抜粋された内容を 1 時限で実施した。短い時間で効率よくワークや発表を行うために、グループに分かれる際、あらかじめ生徒に役割を決めさせていた。
- ・それぞれ(1)の実施効果をおおむね達成しているが、さらに授業のどこで行うかの示唆などを加えて使える教材としたい。

## B 奥田修一郎先生のコメント

- ・同じような教材はあるが、これは会社の事例が現代的で良く出来ていると思う。そのため、生徒が会社に対するイメージを作り易い教材である。
- ・会社を応援しよう！では、投票するときに社会の状況の変化についての工夫も欲しい。
- ・この要望に関しては、岡部氏から、ニュースを流す場面があるので、それを紹介するとして、DVD教材のなかのニュース場面が紹介された。

#### 4 時間目 実践報告「探究活動の試み」

##### A「中学校 3 年間の探究活動～卒業レポートに向けて～」

川村由美子先生（大阪市立咲くやこの花中学校教諭）

###### (1) 実践校について

- ・2008 年に大阪市内はじめての併設型中高一貫校として開校。現在の 1 年生は 12 期生となる。ものづくり、スポーツ、言語、芸術の四つのジャンルで生徒を募集、6 年一貫の教育を目指す学校で、中学は各 20 名×4 コース。生徒は多様で、学力は幅広い。
- ・私は教員生活 12 年目、本校 9 年目である。

###### (2) 探究活動について

- ・探究活動のねらいは、4 点。一つは、評価活動の充実。二つ目はアクティブラーニング活動の推進。三つ目は教科横断的カリキュラム。そして四つ目が社会とのつながりを実感させることであり、ここでは専門家や公的機関への取材や N I E の導入がある。
- ・3 年間の探究活動の流れは、全体は、①課題設定、②調査活動、③分析・まとめ、④発表である。その流れのなかで、一年生は世界のさまざまな地域の調査を行い、二年生で観光大使になって都道府県の魅力を伝えようという調査活動を行わせ、三年生の卒業レポート（A4、5 枚以上）で総括する。それぞれの学年での取組みでは、先に挙げた基本的パターンは変えずに、学び方を学ぶことに力を注いでいる。
- ・当初は一人で担当していたが、最近は国語科、英語科の協力もえている。
- ・また、外部との連携では、昨年は 11 件外部インタビューにでかけている。

###### (3) 卒業レポートの実践と成果

- ・まず、持続可能な社会についての学習を終えた後に、ブレインストーミングやマインドマップを作成させて、課題設定を行わせる。
- ・そのなかで、課題設定のための個人面談指導を並行して行う。
- ・夏休みには文献資料収集、休み後に新聞スクラップ、専門機関や専門家へのインタビューなどを実施する。
- ・12 月にレポートを作成、その後パワーポイントの作成を行う。それを終えて、学級予選会を行い、クラス代表を決め、学年プレゼンテーション大会を行うという手順である。
- ・テーマの設定では、保護者との対話などから浮かび上がるものもある。
- ・探究活動を通じて生徒の学力があがってきているのが実感できる。その例をパワーポイントの変化（省略）で示す。また、最初は指導を全部自分で行っていたが、生徒がお互いに指導しあうというような成長も見せて、すべてを担わなくてもよくなっている。
- ・評価は、ルーブリック評価とパフォーマンス課題で行っている。
- ・課題は、内容のさらなる質的向上、生徒自身が取り組むアクティブラーニングの推進などがあるが、ほかにも、授業時間の確保、評価の方法の改善や工夫、費用の問題などがあり、今後解決してゆきたい。

## B「N I Eを活用した探究活動から社会討論へ」 飯島知明先生(大阪府島本町立第一中学校教諭)

### (1) 自己紹介とこれまでのN I Eの取り組み

- ・民間会社から教員になった。当初は困難校で、言葉がすくなく、すぐに「きしよい」という生徒たちとの格闘のなかで、単純に新聞を読むことから始めた。
- ・現在も朝学習タイムは、新聞タイムとして全校で10分間新聞をよませている。
- ・ニュースは最新のものが勝負なので、新聞は当日の朝刊を使っている。4時起きで、5時には学校に着き、朝練の前に新聞を切り抜き、教材作成、印刷して全クラスに配布している。それを20年間続けてきた。
- ・その間に教えた教育大の附属の生徒からは、授業前に「一緒に読もう」と言ったら、「先生、書いてあること読んだら分かる。書いてないことを教えてんか。」と言われた。ここから、読むだけでなく、探究活動と組み合わせたさまざまなN I E活動へと展開させてきた。
- ・現在の学校に戻ってからは、「しっかり教えて」という逆の言葉も受けている。
- ・新聞を読む中で、自発的にスクラップファイルを作る生徒が出てきている(8割)。また、スクラップノートを作り、新聞記事から感想、イメージ図、統計などを調べる生徒も出ている。さらに、記事を手にフィールドワークにでかける生徒もでて、巡検なども生徒と一緒にやっている。
- ・協働(共同)学習がひろがってきた。そのなかで、丹松先生との出会いがあった。

### (2) 討論会へ

- ・新聞を使った協働学習は、情報収集、選択、議論、思考の再構築というプロセスをたどる。その最後に解説発表を行う。これは、生徒どうし、クラス内、学級ごととひろがり、保護者も発表会に参加するまでになった。
- ・そのなかで生徒から他校と練習試合をしたいという声があがり、咲くやこの花中や大阪教育大附属中との「解説合戦&社会討論」が行われた。そこからさらに他校を含めて、これまで17回の討論会が行われて、中高35校、のべ約2000人が参加してきた。
- ・討論会ではプロの解説者が手弁当で来てコメントを行ってくれている。

### (3) まとめ

- ・社会科の授業では、ジレンマを含んだ教材には生徒は食いついてくる。解答のないもしくは難しい問題に、価値判断をさせる、それを教師がもう一度揺さぶる、そしてもう一度の価値判断という流れの授業を組み立てたいと考えている。

### <質疑>

Q：素晴らしい実践だが、評価が見えないがどうなっているのだろうか？

A(飯島)：新聞を読むと知識が増える。それはテストで判定できるのではないか。プレゼンテーションは表現であり、三観点をこまかくではなく、全体として看取りをすればよいと思う。例えば、課題などはしなくてもよいという逆逆にやってくる。中身に関しては、生徒の記述をざ

っと見て、B判定を基準にそれより上かどうかで判断している。

A (川村)：探究活動でのルーブリックを作成して評価している。

C 李洪俊先生(大阪市立大和川中学校教諭)からのコメント(予定の丹松先生がご都合で欠席のため李先生にコメントをお願いした)

- ・お二人とも、注入型とはちがう、生徒にとって楽しく、わかりやすく、知の探求のこころみを見事にやっている実践を発表してくださったことに敬意を表したい。
- ・2つの実践は、すぐにできた取り組みではなく最初は試行錯誤して、徐々につくりあげていった記録であること。コツコツと影で努力しているのがよく分かると思う。とにかく教材研究のパワーが一言でいうとすごい。そして、持続した取り組みの中で生徒がよく成長しているのがよく分かる。
- ・両方に共通することは、新学習指導要領のねらいがそのまま出ていることで、またそれが成功していること。すごいなと思うけれど一方で自分ならできるかなとふりかえるところもある。2つの実践は、時間をかけて取り組んだ結果なので、私たちが同じことをできなくても、それらから良いものを1つでも2つでも取り入れて実践を重ねていけば、いずれよりよい授業ができるようになっていくでしょう。ただしやり方はそれぞれ個性があるので自分独自で作って行くしかないけれど。
- ・評価の質問が出たが、生徒に相互評価させて、その上で、自分でやるというのは生徒の思考力・判断力を高めたり、教師の時間を有効に使うという意味からも良い方法だ。よく指導と評価の一体化といわれているので、いろいろ工夫して努力すれば良いのだと思う。
- ・川村先生のケースでは、中高一貫校であるからできるのではなく、一貫校でありかつ川村さん自身のしっかりしたねらいがあるからできるのだと思う。とはいえ、生徒と学びながら活動を進め、(知っていることと分かることが違うように、)生徒の興味関心を掘り起こし、そこから授業をはじめないと生徒の学習意欲を高めることができないのはどこの現場でも同じでしょう。全く同じことをしなくてもそれに近いことを少しずつやれば良い。
- ・一つ心配なのは、川村先生や飯島先生が転勤した時で、どの学校でも継続できるやりやすい方法を考えておいて欲しいと最後に付け加えておきたい。

#### <篠原代表からの最後のまとめ>

- ・本日のプログラムはこれで終了したが、後日まとめをアップするので、とくに樋口先生の講演内容について復習していただきたい。
- ・今回提案した実践例は、いずれもわれわれの部会活動(教材作成研究会)の中から出てきたもので、それぞれの先生の実践について部会で社会科教員、エコノミスト、教育関係者が複数回議論を重ね、当初案を改善修正した結果である。
- ・学習効果を高める上で、生徒の積極的な学習参加は最重要要件である。本日はその面できわめてすぐれた実践例を紹介したが、成果を上げるうえで担当教員の負荷が大きいという問題が残

っている。経済教育ネットワークでは、今後とも、先生方が比較的簡単に利用できるような教材に改善していくという作業を進めたい。

- プログラムの良し悪しについて、従来は授業を受けた生徒に対するアンケートやテストの点数などで評価していたが、それでは「何を学べたか」、「どう学べたか」を主観的に確認できるだけである。今後は、そのプログラムに参加した生徒が、その後に問題発見力、問題解決力、分析力、考える力など、どのような力をつけるのに役立ったかを評価できるモデルを AI やビッグデータ分析手法を使って開発していく必要があると認識している。

以上で、第一日目は終了した。

記録と文責 新井